

発行所 社会通信社 発行人 滝野 忠

ホームページ <http://shakaitsuushin.cool.coocan.jp/> e-mail: shakaitsuushin@nifty.com

東京都渋谷区本町六丁目二八―二―九〇四 電話・FAX(03)3299―5367

郵便振替 〇〇―一〇〇―九―五八四三一 労金 中央労金本店 No.1154163

くもくく

■巻頭言■

参院選総括について (二)

参院選結果について

滝野 忠：2

恥知らずな日本独占資本と安倍政権

原野人：4

避難者訴訟、仙台高裁第6回尋問

原発事故被害者

：5

―「復興」の実態と、つのる被害者の苦悩―

『相双の会』

学習会が始まった! 「国家について」 (レーニン講演録)

―第1回学習会レジメと5つの社会―

：7

「国家について」の第1回学習会

―「国家」とはなにか―

森勉：8

5つの社会と奴隷制

中澤 秀行：11

読者からのおたより

：13

刊旬 社会通信

NO.1296

二〇一九年九月一五日号

二〇一九年九月一五日発行
(毎月一日・一五日二回発行)

参院選総括について (一一)

不安は社会問題への関心と意識を萎縮させ、人間の能動性、活動性を低下させる。歴史の発展は人類、こんにちでは労働者階級の社会的実践にある。選挙活動、投票もその一環だ。現代の資本主義社会は、労働者階級とその家族が有権者の90%を占める。支配階級の思想・反動攻勢は「かんたん」になった。まず6000万人の労働者階級を抑え込む。労戦再編・政界再編は、労働者階級の自主性・自発生と未来の社会をつくる創造性という意識を弱めた。

不安はこのように活動力を鈍らせる。権力者は不安をあおる―これもまた資本の思想攻撃である―ことに全力を上げる。少子・高齢化・人口減少だ、50年後、人口は半減する、おまえらはどうするか考えろと。社会保障は維持できない、入りをふやし出を減らす以外にない、協力せよ、そのためには死ぬまで働けと。資本による生産力の発展は、自然と社会の調和を壊す、いわゆる環境問題である。科学の発展は気象学を進歩させる。リーダーはピン・ポイントで気象状況をとらえる。お上は「50年に1度の大雨の危険がせまっています」と、ドラ声を張り上げる。「どうすればいいの」ここでも不安の増幅だ。

「不安の増大」は、かならず質に転化し、社会全体への不満、異存へと発展し、社会変革への条件をつくる。だから、支配階級は、不安がラップとなって社会を揺り動かすことがないよう、「解消」策に躍起となる。「脅威」の宣伝・扇動である。南北朝鮮、中国が「敵」とされ、脅威論が叫ばれる。「脅威」論は意識を内に向け民族主義―排外主義―を強め、社会的問題への意識を萎縮させ、能動性、活動性を封じる。

労働者階級を「貧乏に慣れさせる」という攻撃もある。TVスタジオを「わが家」にする資本の茶坊主に「子狸」のような面付きの森永卓郎なるタレントがいる。彼は数年前「300万円で生活できる法」という本を書き、大いに儲けた。さらに「200万円でも…」を出した。彼は貧乏をネタにどれほどの印税を手にしたことか。

ここ数年の賃上げは、本当に賃上げか。労働組合員に聞いてみればいい。「賃上げにはなっていないません。賃金は下がっている、さらに労働がキツクなっています」と答えてくれる。それは青年たちの生活、消費動向にもあらわれる。青年労働者は「車が好きだ、買いたい、が買えない、なぜか」と問い、「買う、走る、停める、給油、整備、安全に税がかかる、若者には維持できません」という。車を使いこなすには賃金が足りない。支配階級は賃金がウンと安いことを知っているから、彼らに株式投資(NISA)や投資を扇動する。アルバイト(副業・兼業)を奨励するまでもなかった。

金利はゼロである。小さな「財産」家は社員持ち株制度ともあいまって、労働者意識でなく小市民意識の虜(とりこ)とされる。資本主義の変革めざしたたかう者を保守とみなし、資本主義維持のための「金儲け」の諸政策を革新とする思想傾向をつくる。これら思想へのバイ菌をばらまくのが前号でも指摘したプチブルインテリたちで

ある。

ローマの名言に「民衆が熱心に求めるのは今や二つだけ、パンとサーカス」がある。パンとサーカスとは「食べ物と娯楽（見世物）」である。NHKは安倍がひいきする中井貴一の『サラ飯』を朝から晩まで流す。代替わりから、ラグビー、オリンピックとおまつりが延々と続く。日本はこうして沸騰する茶釜の状況がづく、安倍はその間に憲法改悪を企む。これらはすべて矛盾を先延ばしし、目先を変え、考えさせない考えることを忘れる世論誘導となる。誘導の道具が国家・権力者たちに買収されたマスメディアである。国家とマスメディアはプチブル・インテリ（学者・文化人・タレント、評論家・ジャーナリスト等）をこれまた買収する。小遣いを与え、彼らのしつぽとする。

基本矛盾と副次的矛盾

政界再編そして小選挙区制導入は、日本の政治を保守2党制とした。立憲と国民の前身である民主党は、総資本が労働者階級とインテリ層に支持を持ち全国民を結集できる社会党を解党するためにつくった政党だ。民主党の生成、発展、凋落は総資本が見捨てた党の姿である。自民党と2つの主要野党の政策は原発問題以外にほとんど違いがない。貧困は資本主義の基本矛盾→大きくは生産力と生産関係、さらには私有財産制度と社会的分業が生む。

主要野党は主要矛盾と副次矛盾を考えない。副次矛盾が主要矛盾から来ることを考えようとしなない。副次矛盾が主要矛盾であるかのように考える。だが、権力者は主要な矛盾と副次的な矛盾を知っている。さらにプチブル・インテリは視野がせまい。本質と現象をいっしょくたに考える。己の専門分野が主要なものと考ええる。彼らの視野からも基本矛盾は消える。だから、彼らの「構想」は無政府主義的かつ空想的となる。BI、最近のMMTなる珍理論もその一つである。

くり返すが、権力者は主要な矛盾と副次矛盾の区別を知っている。資本主義の根本にかかわること以外なら副次矛盾をバクリ、自分の政策とし、庶民をたぶらかすことなど屁とも思わない。権力を維持するためなら、彼らの胃の腑はなんでも飲み込んでしまう。保育所・幼稚園、奨学金問題等々全てがそうである。

主要矛盾は権力機関（裁判所、警察、官僚等）を使って徹底的に弾圧する。沖縄そして原子力、軍備増強、社会保障切り捨て、たたかう労働組合への弾圧、増税問題がそうである。

思想状況

歴史的背景が二つある。第二次大戦後の70年、戦争の「ない」時代が続いた。憲法の「理念」を守る力が、変えたいとする力を上回っていたからだ。そこから、「これからも戦争はない」との意識、幻想が生まれる。「平和ボケ」である。

もう一つは天皇を「平和のシンボル」に利用し、安倍自民党の戦争政策への「中和剤」とする。天皇そして天皇制が「玉」とされ、権力の道具とされる。この思想攻勢にとりこまれているのは、「リベラル」といわれる知識人層に多い。その層の思想が国民に伝染する。

（滝野 忠）

恥知らずな日本独占資本と安倍政権

福島大事故を経験した日本の独占資本と政府であれば、まずは速やかな脱原発を優先行し、温暖化対策としては自然エネルギー発電の本格的な開発と、石炭火力の全廃を進めるべきである。速やかな脱原発のためにも、天然ガス火力の増強や重油火力や石炭火力も暫くは許されるとしても。

しかし労働者が労資協調路線に封じ込められていて、独占資本が目先の利潤を存分に追求できる日本では、事態の進行は逆となっている。

ドイツ政府は2022年に原発全廃を予定し、38年には石炭火力からも撤退する方針を決めている。これがまともな先進国のエネルギー政策というものである。

日本政府が昨年決めたエネルギー基本計画では、将来も原発に発電の2割強（2030年で20〜22%）を依存し続け、老朽原発の再稼働と建て替えや新型原発の新増設も目論む。石炭火力には同年で26%を依存する計画だ。

政府の最近の温暖化対策戦略でも、原子力規制委員会の判断を尊重し原発の再稼働を進めるとした。「脱炭素社会」実現のためとして「安全性、経済性、機動性に優れた原子炉の追求」をも目標とする。アメリカはそれらしき新型原発を開発中とされる。日本は石炭火力の新設計画も輸出計画ももつ。ここでも安倍君とトランプ君は瓜二つだ。いかに優れた原発であっても、いかんともしがたい高レベル放射性廃棄物は発生するし、大事故をゼロにはできない。いかに最新の高効率石炭火力といえども二酸化炭素を少しばかり減らすに過ぎない。その有効な活用法は未開発だ。

脱原発、脱石炭、脱石油、自然エネ100%へ向かうのが世界の主流だ。ドイツでは「自然エネ最優先」も法律で定めた（2000年）。送電会社には自然エネを原発などより優先して接続する義務が課され、電線に余裕がなければ増強しなければならぬ。一時的に電力供給が需要を超えそうな時にも、自然エネ発電所が抑制を求められるのはいちばん後である。日本では自然エネ発電が真っ先に出力を落とすよう要請され、補償もされないのとは対照的である。

09年に欧州連合（EU）が大手電力による独占を改善し、参入を自由化するため、送電の分離を各国に義務付けた。ドイツでは大手電力会社の送電部門が分離され、4社の送電会社が出来た。

発電量に占める自然エネルギーの割合は昨年ですでに40・4%までに伸びている。日本では大型水力を含めて17・4%に過ぎない。

日本では発電・送電の分離を分社化などでごまかし、主要な送電線は電力会社に占有されたままである。電力独占資本は自分の原発や火発の稼働率を高めた方が儲かるため、自分の発電所の送電を優先する。自然エネ発電の接続要請は「電線に余裕がない」と断る。こうして風力発電等の設置は一向に進まない。

（原 野人）

「復興」の実態と、つるる被害者の苦悩

―避難者訴訟、仙台高裁第6回尋問―

7月29日に福島原発避難者訴訟控訴審の第6回訊問が仙台高等裁判所で行われた。当日は南相馬市小高区から避難している國分富夫（「相双の会」会長）と、川内村から避難し慰謝料支払いも住宅提供も打ち切られて「車上生活」をしているAさんの二原告が証言した。

原告側代理人の尋問への國分富夫の証言（要旨）

「私は4年前から時間のあるときは小高に行っています。自宅は3年前にとりこわしましたが、生まれ育った小高に行くのが気持ちが悪くなります。それに帰還している知人が寂しい思いをしていますから、少しでも話し相手になりたい」。小高の居住者数は公式には事故前の3割弱とされますが、3割弱戻ったという実感はありません。帰還した年配者は『若い人が戻る分けない。若い人はこれからが人生なのだから』『帰って来いとは言えない』といいます。

「たくさんの家が壊された後の更地の3〜5割には売り物件の看板があります。一般住宅が新しく建てられているのが見受けられるが住んでいるのは少ないと思われます。小学校中学校の児童生徒はスクールバスで避難先から通っているのが多い。だから小高に行っても、子供を減多に見られません」。

「今年の1月に小高復興拠点施設として『小高交流センター』がオープンしましたが、住民は数人程度しか見かけられない。マッサージ器を利用する程度です。つくられた交流はその場しのぎで終わる。コミュニティは長い時間をかけてできるものです。しかし小高では年寄りだけが点在して、心も暗くなつて話などしたくないという人もいます。「これからどうする」と聞いても何も言わない。精神科医の先生によれば事故のトラウマで希望がなくなった人が多いそうです。

帰還した方には避難先でいたたまれなくなった人もいます。避難先のお祭りに行ったら『避難者が来た』と白い目で見られたりするため、どこから来たか近所に言えなかったり、避難先に家を建てたが嫌がらせを言われアパートに移った方がいると聞きます。」

不愉快な被告（東京電力）代理人の反対尋問

被告代理人（東京電力側の弁護士）から反対尋問をうけます。その態度は、被害者の心情を思いやるところは少しもなく、とても不愉快なものだった。

被告代理人は「賠償金で相馬に家を建てましたね」とか、「東電からの慰謝料を受けとりましたね」など、無意味な質問を繰り返した。被害者に「金を払ってやっただろう」と念押しするような態度である。これには原告代理人（弁護士）も「賠償や慰謝料については何ら争っていないのに、なぜ無関係なことを尋問するのか」と抗議されました。國分富夫も怒りに身を震わせながらこう答えた。

「賠償や慰謝料を支払うのは当たり前のごとくでしょう。全てを奪われたのにそんなこと言われる筋合いはありません。賠償と月10万円の避難慰謝料は支払われました。しかしそれでは済まないから裁判で訴えているのがわからないのですか。私はお金がありませんでしたから小高の自宅を建てるにしても、基礎は休日と朝と夜に自分でつくりました。材木は山からトラクターを使い引き出しました。また多くの友人に手伝いを受けて出来上がった家でもあり、感謝の気持ちで一杯です。子供たち三人にとっても思い出深い家です。東京に住んでいる娘に『家を解体する』と告げたら、家とのお別れに飛んできて家の中に大きく『有難うさようなら』と書いて帰って行きました。

原発事故がなかったら、そろそろリフォームをして生涯を閉じる家にしようと思っていたところでもありました。また息子家族も近くに家を建てる計画をしていた矢先でもありました。家というものは家族全員の思い出の詰まった大事なものあり、解体するのは悲しくてやりきれないものです。また、被告代理人（東電弁護士）は「あなたの娘さんは新しい仕事をしているのですね」などと尋問してきました。「家族も仕事につけたから、いいではないか」と、言わんばかりの質問には、國分富夫はこう答えました。

「娘は事故当時、南相馬市役所職員だった。原発事故により夜遅くまで体育館で物資の受け入れ、朝早くから避難者の食事配布、日中は市役所の業務と休みも一切取れず、毎日住民から怒鳴られながら頭下げて働いていました。その結果体調を崩し長期療養となり退職を余儀なくされるまで追い詰められた。精神科医先生の親身になった治療の結果、何とか体調を取り戻し新しい仕事につけたのです。そんな時多くの自治体職員が体調を崩して長期療養者がいることをマスコミで取り上げられた事もありました」。さらに被告代理人が「小高区役所前のモニタリングの線量計これだけ（0・07）低いですよ」と質すと、「その線量計の土台はコンクリートであり線量は上がるわけがないにもかかわらず、線量が下がったという証明に出してくるのはおかしい。確かに自然界にも放射能がある。それに医療被曝もあるが、それから逃れて生活はできません。原発事故により自然界に最も有害な放射性物質が放出されプラスされたのです。危険な放射性物質セシウム137は100年で10分の1までしか減らない。全消滅するには200年から300年かかると言われています。本来なら少なくとも100年の保証はすべきです」と反論した。

尋問を終え、國分富夫は「我々被害者には何の落ち度もない。事故をおこした東電に100%責任があるにも関わらず、反対尋問で言いたいことを言ってくる。そして事故を起こしたことを正当化しようとしている。被害者を馬鹿にした言い方はないだろう。『賠償しましたよね』『これだけ放射線量は下がりましたよね』などと当たり前の人間であったら言えないでしょう。どこまで庶民を被害者を馬鹿にしているのかと思わざるを得ない」と語った。

〔原発事故被害者『相双の会』No.88より抜粋（2019年9月1日発行）〕

学習会が始まった！「国家について」（レーニン講演録）

―第1回学習会レジメと5つの社会―

レーニン

国労上野反合研の仲間たちが営々と学習会を積み重ね、「国家について勉強しよう」となった経過、背景については『本誌』No.1295号に明らかです。近現代の科学的社会主義にかんする古典―マルクス、エンゲルス、向坂逸郎―をくり返し学び、下部構造の問題から上部構造の一番難物である「国家」となったのです。

難しい課題をやさしく、沈没しないように説いてくれるモノはなにか、思い立ったのが、レーニンの「国家について」という若い活動家への講演録です。時期は1919年7月、内戦そして諸外国の侵略軍と「祖国か死か」の階級戦が戦われている中でのことです。こんな時にも、レーニンはマルクス、エンゲルスに原則を学び、その学びを弁証法的に現情勢に適用し、若者の意識を高める努力を怠らなかつたのです。

向坂先生は、レーニンを「マルクスが、エンゲルスのいうように、史的唯物論と剰余価値の発見によって、社会主義を科学としたとすれば、レーニンは、帝国主義の時代のマルクス主義者として、社会主義革命を具体的に科学にした」〔向坂逸郎著『レーニン研究入門』（15頁）〕と評します。レーニンは社会主義・共産主義革命を、遅れた資本主義国家であつたロシアで実現したのです。

レーニンはマルクス・エンゲルスの思想、考え方を、ドイツのマルクス・エンゲルスの弟子たち以上に鋭く、正確につかまえておりました。マルクスとエンゲルスの往復書簡にはロシアの社会主義者とのものが数多くあります。資本論のロシア語への翻訳がいちばん早かつたことでも、それはわかります。

レーニンは1870年生まれです。レーニンはエンゲルスに会いたいと許可を求めましたが、かないませんでした。それはエンゲルスが意地悪をしたからではなく、病気で面会がかなわなかつたのです。エンゲルスは1895年5月、75歳でなくなりました。レーニンは1895年秋、「なんとという理性の燈火が消えたことだろう、なんとという心臓の鼓動をやめたらう！」との題詞を添えエンゲルスの追悼文を書いていきます。この文章は『マルクス主義の3つの源泉』、『カール・マルクス略伝』『国家について』とともに、マルクスとエンゲルスの学説の基本、真髄を知るうえで必読の文献です。

レーニンはこの時、25歳の青年です。レーニンは「運命が…マルクスとエンゲルスを出会わせたときから、ふたりの友の生涯の仕事は、彼らの共通の事業となつた。それゆえ、F・エンゲルスがプロレタリアートのために何をなしたかを理解するためには、マルクスの学説と活動とが現代の労働運動の発展にとつてもっている意義を、はっきりつかむことが必要である」と、こう続けています。

「マルクスとエンゲルスは、労働者階級とその諸要求とが近代経済制度の必然的な所産であり、この制度はブルジョアジーをつくりだすと同時に、不可避的にプロレタリアートをつくりだし、組織するということをしめした最初の人であつた。」

彼らは、人類を、こんにちそれを抑圧している災厄からすくい出すものは、個々の高貴な個人の善意の企てではなくて、組織されたプロレタリアートの階級闘争であることを、しめした。

マルクスとエンゲルスは、社会主義とは夢想家の思いつきではなくて、近代社会の生産力の発展の終局の目標であり、必然的な結果であることを、その科学的労作において明らかにした最初の人であった。こんにちまでの成文史の全体は、階級闘争の歴史であり、ある社会階級の他の社会階級にたいする支配と勝利の交替の歴史であった。そして、これは、階級闘争と階級支配との基礎であるものゝすなわち、私的所有と無秩序な社会的生産とが消えさるまでは、こんごもつづくであらう。

プロレタリアートの利益は、これらの基礎を廃棄することを要求する。だから、組織された労働者の意識的な階級闘争は、これらのものに向けるべきにたいして向けられなければならないのである。そして、いっさいの階級闘争は政治闘争である。(レーニン全集② 3(4頁))さらに天才レーニンの天才を示すのが「(二人は)プロレタリアートの不断の成長に望みをかけた」「労働者階級に自分を認識し自覚することをおしえ、夢想を科学におきかえた」です。

レーニンの生涯は革命情勢そして革命の時代であった。ソ連崩壊という「大反革命」から20年になる。だれも彼もがレーニン、そして社会主義の悪口をいう、ヘソ曲がりなぼくはレーニンの勉強をしたくなる。全集の埃(ほこり)を払った。そこで改めて思ったことは、レーニンの論文のほとんどが政治論文―階級および階級闘争の実践―であることです。(編集部 滝野 忠)

上野反合研「国家について」の第1回学習会

森から学習会員および中澤へ 昨日、10名の参加で第1回を行ないました。少し分量が多かったので、消化不良の方もいたかもしれません。

今回は、それほどページ数は進みません(レーニン全集29巻 485(491頁))ので、今回の箇所で分からなかったところの質問も含めてやりたいと思います。ぜひ、事前に読む、学習会と学習会の間にもう一度、自分ひとりで読むということをやってみてください。レーニンが始めの方で、勉強の仕方を書いている通りですね。

滝野解説 「国家について」の講演は1919年7月11日、反革命軍との内戦、諸外国の干渉軍とのたたかいが、「祖国か死か」の状態にあった時です。レーニンはそんななかでも社会主義への展望、資本主義と社会主義における国家の違い、階級の本質をボリシェヴィキ党の労働大学―スヴェルドロフ大学―で若者に講義をしたのです。スヴェルトロフはレーニンがもつとも信頼し、組織を担当した活動家です。しかし、身体は強くなかったようで、34歳の若さで世を去ってしまいました。彼を記念するのがスヴェルトロフ大学です。

森レジメ 冒頭、レーニンは、「国家の問題は、もつとも複雑な、難しい、ブルジョア学者や文筆家や哲学者によって最も混乱させられている問題の一つ」だとして、「わからなかった箇所やはつきりしない箇所に自分で印をつけて、二度も、三度も、四度

もそれに立ち返るようにし、わからずにしまった点を、あとで、読書やいろいろの講義や対談でさらに、補い、解明するようにしなければならぬ」と基本的な勉強の仕方を述べ、「対談や講義の補いに、マルクスとエンゲルスのもっとも主要な著作のいくつかを読む」ことを勧めている。

そしてこれも、「初めて読んだときにわからなかったことも、繰り返し読んで読み、のちにいくぶん違った側面から問題を取り上げればわかるようになる」と励ましながら、「肝心なことは……この問題を自主的に取り上げる能力をもつようになる……自主的に判断することができるようになる」ことが大事だと、要は、自分の頭で考え、自分のものにするという勉強の仕方を述べている(477〜478頁)。

☆ 国家の問題における混乱 ― 宗教上の問題との混同(479〜480頁)

「神的なもの」「超自然的なもの……」― 搾取階級の利益と結びつき、彼らの利益に奉仕する

これまでの「国家の学説は、社会的特権を弁護することに、搾取の存在を弁護することに、資本主義の存在を弁護することに、役立っている」

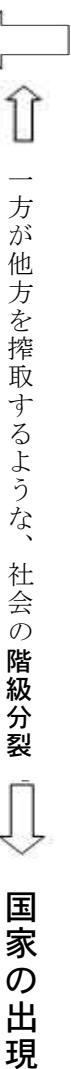
「不偏不党」や「純粹科学」はあり得ず、「さまざま階級の相互の闘争を見る」REP II 西洋では、いわゆる「王権神授説」、日本では、「万世一系の天皇」(帝国憲法)

☆ 国家の発生、発展(480〜485頁)

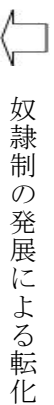
① ここでもレーニンは「問題を正しく取り上げる」「科学的見地から取り上げる」仕方として、「基本的な歴史的関連を忘れないこと」、発生・発展からの考察が大事だとして、エンゲルスの「家族、私有財産および国家の起源」を紹介する。さらに、資本主義の発生や搾取の発生の問題、社会主義の出現などの問題でも、「その発展全体に歴史的な回顧を与えてこそ」正しく取り上げることができる、という。

② 「国家がつねに存在していたわけではないという事実である。国家のなかった時代があった。国家は、諸階級への社会の分裂が生じるところで、また生じるときに、搾取者と被搾取者が出現するときに、出現する」(481頁)

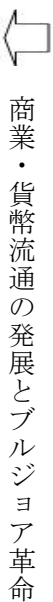
③ 階級のない社会 ― 家長制的家族、同族・氏族家族、原始共産主義 ― 国家(組織的暴力機構 || 軍隊・監獄)はなかった ― 慣習の支配、長老の権威、婦人の高い地位



← 奴隷所有者(土地・道具などの生産手段と人間を所有)と 奴隷(労働し、他人に労働を提供)



← 農奴制(農奴主的地主と農奴的農民) ― 地主は農民を所有しない



← 資本主義(資本家と労働者)

「諸階級への社会のこの分裂や、階級支配の形態の変化を、基本的な導きの糸としてしっかりとにぎり、すべての社会問題・・・をこの見地から説明する場合にだけ、このように異常に雑多、はなはだしく多様な事物・・・を理解することができる」(484頁)

④「統治だけを仕事とし、統治のために特殊な強制機構、他人の意志を暴力に服従させるための機構―監獄、特殊な人間部隊、軍隊、その他―を必要とする特殊な人間集団が出現するときに、国家は出現する」(482頁)

「人類のこの発展、すなわち奴隷制から農奴制を経て資本主義へ、・・・つねに国家が発生している・・・。国家は常に、社会から分離し、統治だけを・・・仕事とする人間の集団からなる、ある種の機構であった。」(485頁)―統治の専門家・国家の代表者(暴力の機構)と、統治される人間に分かれる

⑤「階級がなかったときには、搾取者と被搾取者がなかったときには、なぜ国家もなかったのか、またなぜ階級が発生したときには国家も発生したのか、という問題を提起するとき、そのときにはじめてわれわれは、国家の本質と意義の問題にたいするはつきりした答を見いだす」(485頁)

REPⅡ社会の階級分裂の結果、国家という暴力機構が誕生し、階級社会の形が変わっても常に国家があったとされるが、そうになると、なぜ階級社会に国家は必要なのかという問いに当然至る

今回の討論

☆「国家」「国」といったものに、何を連想しますか

- ①公平なものを期待(「第三者機関」、裁判、労働委員会、公正取引委員会・・・)
- ②公共性(「民間は利潤追求」、過疎地における公共交通・郵便局、NHK・・・)
- ③信頼性(「お上のやることに間違いはない」、国家による統計、年金、郵便貯金・・・)
- ④ビッグプロジェクト(「国家予算」、新幹線・・・)
- ⑤その他、出し合ってみてください

「悪をくじく」「弱者の味方」というイメージはあるか?

☆歴史の発展についての復習(歴史の発展法則と上部構造とくに国家・思想)

☆豊臣秀吉く徳川幕府初期

「検地」Ⅱ石高年貢制、領主対自営小農民(土地に緊縛、職業の自由なし、土地売買・質入れ禁止)

「刀狩」Ⅱ民衆の武装解除、兵農分離、身分制

本多正信「百姓は天下の根本・・・百姓は財の余らぬように、不足なきように収むるべし」

☆レーニンなぜ、国家Ⅱ暴力機構ととらえたのか?

今後の進め方

第2回 485頁く493頁 内容Ⅱ国家とは何か、国家についての論争、

エンゲルスの『家族、私有財産および国家の起源』について
レポーターⅡ

討論内容(予定) Ⅱ 国家の本質、資本主義国家における偽装

第3回 493頁〜496頁 内容Ⅱ 民主的共和制と議会・普通選挙権、まとめと

これ以降の展開

レポーターⅡ

討論内容(予定) Ⅱ ブルジョア民主主義、社会主義の国家、日本国憲法

(2019年6月14日 森勉)

5 つの社会と奴隷制

中澤から森へ 学習会ではレーニン全集29巻の「国家について」をやるのですね！
別添(「マルクス・エンゲルス・レーニンの『国家論』を勉強するために」※『本誌』前号6頁以下掲載)は、参考になればと思って作成しましたが、これは第一弾でして、続きが沢山あります。思いつくままに記します。(2019年6月15日)

中澤 『経済学入門』に続いて「国家について」の学習会ということですので、関連して、「五つの社会」と「奴隷制社会」についてレポートさせていただきます。

(1) 『経済学入門』の第一章は「経済の見方 考え方」となっています。

第一章は、いわゆる史的唯物論の説明に充てられています。私のメモによると、1979年の「労働大学松本教室——経済学コース」での第一回講座の講師は辻確先生でして、『経済学入門』の第一章「経済の見方 考え方」を講義されました。

その時、「史的唯物論と経済学とはその構成要素を同じくする」と言われたのが印象的で、これは大切な指摘だと思いました。

後に、『金融資本論』の著者であるフィルファディングが、「経済学の基本概念は、唯物史観の基本概念と同じものである。それは同じものとならざるをえない」(和氣誠著『マルクス「賃金・価格・利潤」解説』53頁)、と述べていることを知ります。

(2) そんな訳で、『経済学入門』の第一章は史的唯物論が詰まりに詰まった章ですから、本当に時間を掛けて勉強すべきですが、今回は「国家について」を勉強するに当たり、『経済学入門』を突き合わせて復習して欲しいところがあります。

それは、「国家について」のなかでの社会発展史としての、原始共産制社会、奴隷制社会、農奴制社会(封建制社会)、資本主義社会(資本制社会)が、詳細に述べられていくからです。『経済学入門』の「五つの社会」としての「原始共同体」、「奴隷制社会」、「封建社会」、「資本主義社会」、「社会主義社会」の節についてです。

(3) 私は、(1)で述べた講座終了後、食事を共にした辻確先生に質問しました。「日本について考えた時、奴隷制社会とはどの時代を言うのでしょうか?」と。辻先生は「向坂先生は、日本にはいわゆる奴隷制社会は存在しなかったと言っておられる。しかし、向坂先生の方がこのことについて問題提起すれば、学会の一大問題に発展

する。向坂先生が何故に敢えてこれを問題としないのかは、我々の当面する課題は、資本主義社会を歴史の発展法則に従って社会主義社会を実現することであり、古代史の研究、そして日本に奴隷制社会が存在しなかったこと等の研究はその後の課題ではないではないか、ということだった。」と答えられました。

後に辻確先生は共著である『社会発展史』（労働大新書、1987年刊）のなかで、次のように記されています。「日本は奴隷は存在していたけれども、日本の社会が奴隷制社会であったかどうかは疑わしいという段階で、奴隷制衰退期の隋・唐の政治制度を学びとることになり、ついに、はっきりした奴隷制社会の時代は経験しなかったようです。」（同書49頁）と。

（4）では、当の向坂先生はどうなのでしょう。岩波書店の『資本論』記念版を刊行した時になりますが、日本図書新聞（1967年11月18日号）に掲載の『資本論』の改訳にて、次のように述べておられます。

「この間、ソ連から歴史家が二人来ていたのです。一人は非常に日本語が出来る人で、戦争前に大使館つきで来て、早稲田で日本史か何かの講義を聞いていたそう、今日露交渉史をやっているといっておりましたよ。コンスタンチノフさんといいます、おしいことに日本に来てソ連に帰ってすぐ脳溢血で死んでしまいました。その人と、もう一人は日本語が出来ない人でしたけれども、モスクワの攻防戦で片腕をなくしてしまったという、彼もやはり歴史家で、ソ連の一八世紀の専門家らしいのですが、その人たちと話をしている非常に楽しかったことは、奴隷制の問題です。

戦争中、ぼくの読んだのは英語かドイツ語で書かれたものしかないのですが、それを読んだ結果、奴隷制度というのは社会発展—マルクスは四つあげているんですが、社会の発展過程においてはむしろ奴隷制が傍系であって、古代から農奴制に移っていくのが正系の発展のしかたである、ぼくはそうじゃないかと思っていたんです。ということは、ギリシャ、ローマだけです、ぼくが読んだ限りにおいては。奴隷があることとはどんな社会でもあります。日本だってあります。しかし生産関係としての奴隷制度、つまり社会の生産を支えている階級としての奴隷制があったのは、ぼくの語学で読めた限りではギリシャ、ローマしかないのです。ヨーロッパの諸国にしてもロシアにしてもないように思うし、中国にしてもぼくはないように読んだ。日本はもちろんないと僕は考えていた。戦争中に、そういう結論をぼくは得ていたのです。だけどぼくは古代史の専門家ではないし、現実に資料をジャンジャン読むことが出来ないのです、いろいろな本を読んだだけです、そういうことは少数のグループではつねにいつていたことなんですけれども（中澤註・和氣誠先生によると「向坂村塾」の「資本論研究会」ではしばしば語られていたそうです）、公の席で唱えたことではないのです。そういう問題をだれかが出して、いったい、奴隷制というものが一般にあったのですかといったら、そのソ連の歴史家は言下に、ソ連ではありませんでしたというのですよ。やはり生産関係の奴隷制は・・・そういう言葉は使わなかったが、つまりぼくと考え方が同じだというわけで、それでちよつと楽しかったのです。」（『資本論』をめぐりて）所収、128〜129頁）という訳です

では、勉強会の盛会を祈念しております。 （2019年6月15日 中澤 秀行）

◇読者からのおたより◇

退任 私は今年7月23日に開催された武庫川ユニオン第32回定期大会で書記長を退任することになりました。31年間にわたり支えて頂いた組合員みなさんに心より感謝申し上げます。：略：今年の闘いで塚原さんが書記長の任に就くことになりました。塚原さんは武庫川ユニオンではまだ1年ですが、ひょうごユニオンの専従を永年担ってこられています。安心して引き継ぐことができます。これからは塚原新書記長を中心に武庫川ユニオンの発展を願っています。

『労働組合武庫川ユニオン機関紙』第321号（2019年8月8日発行）抜粋 小西純一郎

老朽原発・高浜1、2号機、美浜3号機の再稼働を許さない！

原発は現在科学技術で制御できる装置ではなく、一たび重大事故を起こせば、生活を奪い、故郷を奪い、人の命と尊厳を奪い去る装置であることを、福島原発事故が、大きな犠牲の上に教えています。その原発が老朽化すれば、危険度が急増することは多くが指摘するところです。

いま、脱原発・反原発は圧倒的な民意ですが、老朽原発の運転に反対する声はさらに大きく、老朽原発の運転を認める声などほとんどありません。それでも、関電は、来年には運転開始後45年超え、44年超え、43年超えになる老朽原発・高浜1、2号機、美浜3号機の再稼働を画策しています。また、原発の40年超え運転は「例外中の例外」としていた政府は、この約束も反故（ほご）にしようとしています。しかも、原発を動かせば、つまり続ける使用済み核燃料の行き場はありません。

「原発うごかすな！ 実行委員会@関西・福井」は、老朽原発・高浜1、2号機、美浜3号機再稼働の野望を阻止するために、次の行動を呼びかけます。

【1】10月1日～11月22日を「老朽原発うごかすな！ キャンペーン」期間とし、創意工夫を凝らした多種多様な行動を展開する。この期間中には、①各地で大中小の集会、学習会、懇談会、デモなど、多様な催しを工夫して繰り広げる、②若狭全域での大規模なチラシ配布と宣伝行動（拡大アメンバーデモ）を行なう、③京都府下、滋賀県下、福井県下、兵庫県下で街宣車を出して、老朽原発反対を訴える、④若狭、関西で比較的大きな集会を開催する、⑤名古屋地裁の老朽原発裁判をはじめ、各地での原発裁判と連携する、などが検討されています。

【2】11月23日に高浜原発を出発し、12月8日に関電本店に至る200km、16日間の「老朽原発うごかすな！ リレーデモ」を行う。このリレーデモでは、高浜町（高浜原発）↓若狭町↓高島市↓（湖西）↓大津市↓京都市↓大阪（関電本店）のコースの本流だけでなく、

- (1) 福井市を出発し、美浜町を経由して本流に合流するコース、
- (2) 名古屋市を出発し、米原市、大津市を経由して本流に合流するコース、
- (3) 姫路市を出発し、神戸市を経由して大阪（関電本店）に到るコース、
- (4) 奈良市を出発し、大阪（関電本店）に到るコース

などを支流とするリレーデモも行い、最終的には大阪での大集会の開催を計画しています。

本流の出発にあたっては、高浜原発前でも出発集会を行います。また、各コースの自治体には申し入れを予定しています。本流は徒歩で踏破することを基本にし、支流は自転車、自動車、列車の利用も含めて、あまり無理のない行動を考えています。

- (5) 京都北部では、リレーデモ前段行動として、講演会や集会を計画中です。

なお、【1】【2】の行動の積み上げの上に、来年前半に、「老朽原発うごかすな！ 関西大集会」を企画することも検討中です。【1】【2】の行動への、ご賛同、ご支援、ご参加をお願いします。

カンパのお願い 前頁【1】、【2】の創意工夫を凝らした多種多様な行動は、手弁当で準備・実施されます。経費のご支援を戴ければ幸いです。

・カンパ振込先（郵便振り込み） 加入者名：若狭の原発を考える会

口座記号・番号 00930191313644

- ・お振込みにあたっては、通信欄に「老朽原発再稼働阻止行動へのカンパ」とお書きください。
- ・個人の場合は、お名前、お名前公表の可否、住所〒、電話番号、Eメールアドレス、
- ・団体の場合は団体名、団体名公表の可否、代表者名、担当者名、担当者ご住所、〒、
- 担当者電話番号、担当者Eメールアドレスをご記入ください。

◆申込先 木原壮林（若狭の原発を考える会） Eメール kiharas-chem@zeus.conet.ne.jp

090-1965-7102 FAX 075-501-7102

今こそ平和運動 先日 福山地区退職女性教職員の会（退女教）総会での講演依頼を受け「平和教育は、今」と題して 福山の教育現場の現状を話させていただきました。今こそ 退職者一人一人が取り組める平和教育を作っていくと提案させていただきました。また、先の教育委員会会議・教科書採択傍聴の感想をまとめてみました、使ってやってください。3年前までは 発言者は黒塗りだったものが 議論経過を含めすべてが公開になりました。民主的決定に近づけばと思います。

私の方も お盆から来春の選挙に向けた取り組みを開始しました。5期目への挑戦で、ご支援をお願いします。 (広島県福山市議 西本章)

バス労働者学習会に行ってきました 先日、津田沼まで交流会に行ってきました、私の話に対して、約1時間の意見交換があり、真剣な学習交流会でした。私同様に、組合、または会社内で少数として踏ん張っている人たちの集まり。ご承知と思いますが、悩み、苦しみながら踏ん張っている話もあり、素晴らしい仲間たちの集まりだと感じました。私も引き続きこのバス交流会に参加するように要請されました。また、Nバス、Kバスの方々からも八王子での交流会に招待されました。参加してきます。 (八王子 みのお)

梅雨明け後の猛暑、変な年 梅雨明け後の猛暑、そしてここ数日は連日の大雨。本来りんごは寒暖差で着色促進、今年は猛暑だけのため、黄色くなるだけで赤くなりません。変な年です。

思い出の郵便ポストNo.155(2019・9・1)は、新潟県しなの鉄道の終着駅妙高高原駅前の丸型郵便ポストです。8月15日に撮影しました。 (長野県飯綱町、山浦隆芳)

音威子府羊羹が「究極のお土産」に選ばれました この度、地域に根差し、地域の特産品を生かし、地域に愛される「旅のきっかけとなるお土産」の発掘を目的に開催されました「世界にも通用する究極のお土産フォーラム」(国土交通省・観光庁主催)におきまして、全国の銘品747品の中から、有名百貨店のバイヤー様、雑誌編集者様等による1次審査の結果・弊社が製造販売いたします「音威子府羊羹」が1次審査通過百道(115品)の中の1商品に選定をいただきました。

この度の選定は、弊社が平素から心がけてまいりました、地域に根差し、愛される物づくりというコンセプトと、食への安全、安心といった「こだわり」が認められたものであり、改めて物づくりへの責任を痛感しているところでございます。

また、この選定は、お客様皆様のお力添えの賜物と、重ねて感謝を申し上げます。「究極のお土産」選定を機に、現状に満足することなく、弊社従業員一同「良いもの物づくり」に邁進したいと思っています。皆様におかれましても、倍旧のお引き立てをいただけますよう心よりお願いもうしあげまして、「究極のお土産」選定の「報告」させていただきます。

(北海道で一番小さな村 おといねっ。ぶ発『音威子府羊羹』)